

昭和12年9月1日（水）

二百十日天候平穩。鶴市神社祭典振太鼓、賑やかなり。朝中津局に木下君を訪ふ。不用式紙類送付受維書の書き方を尋ね出局。此日より四時まで為替、五時中津局へ行き竹折氏を訪ふ。既に退局後。則ち帰る途中松田様と逢ふ。夕食後子供等を連れ、巖と近所を一巡りして七時頃まで一時間計り。夜可なり涼し。九時頃より日誌を附け、十時寢床。

昭和12年9月2日（木）

局に行く前、中津局に竹折氏を訪ふて、元利金支払い簿を借り受く。十時頃電話あり、同簿直ぐ返して呉れと。永江氏切手請求に行く際、持参せしむ。永江氏方の小娘一日より居らず。切手類の買い受けは永江氏の役目となれり。五時飯る。法規類の背表紙を作る。夜、馨氏来邸、九時半帰る。葡萄を愛子持来たり、余も少し馳走になる。木下君より返事。心得の支払分は八日迄となり、一日分余計に遣り過ぎたる嫌いあり。午後十時寢床、風なく暑苦し。

昭和12年9月3日（金）

昨不用書類行囊（こうのう）五ヶ発送。事務室内、からっとせり。原簿五円、通帳六円の相違に対し名義人来局。永江氏の懇示にて相手の女も承知し、通帳訂正を承諾せり。三週間休む件通告す。五時帰る。昨巖朝より釣魚、鯊（はぜ）七十余を獲、天プラ焼き魚や種々の調理に舌鼓を打ちしが、今夜ライスカレー。十時寢床例の如し。

昭和12年9月4日（土）

巖より塩川へ何か土産をと考究の末、柿羊羹と決し、後刻局に持参を約し、暇乞いして出局す。局にても一同に話す。鶴居長秋永氏臨局、此の事を切出し諒解を得たり。貯金より拾円受取り、一時二十七分発が十分遅れ、四時半には博多着。五時帰着、夕飯準備整ふ。道子元気なるも澄子胃腸を害し居り、今回の出張中止。夜、鰯（どじょう）汁。十時過ぎ寢床。雨戸を明放して寝る。冷風毛布を出して被る。

昭和12年9月5日（日）

十一時道子と松屋に行き、鉄道案内所にて切符を求む。博多より東海道、東北、奥羽、北陸、山陰、幡生に至る十五日、二十円二十五銭。外に土産品を入るる柳行李2、50、土産130、100、100、100、100、100、60×4、計8、70を求め、配達を依託し、道子にアイスクリーム、ライスカレーを馳走し、一時半販る。夕方秀夫鰯13を持参す。稲荷ずしのみ夕食に頂く。アジの天ぷらを秀夫にやり、猶夕食に頂く。理髪35。

昭和12年9月6日（月）

朝早く出発すれば大阪着時刻も余り遅くならず、迎える人も迎えらるる者も好都合とは思ひしも、肝腎のお金が前日、日曜にて準備出来ざりし為、不得止、九時十七分発と定め、七時半簗島局に駆け付ければ、為替は未だ店開き始めるには猶早しと謂った調子に、事務員が（局長さんの娘らしき人と思ひし）局長と夫れでも何か準備に余念なかりし。余は百五十円程入用故、八時半頃まで用意して欲しと謂ひ、又局長さんも渋っていたが、八時

四十分頃までOKの旨答えれば、諒として一度帰宅。道子久子は夫々、風呂敷包みと柳行李とを提げて八時三十分先発。余は年金八月分及び150円を受取るべく、定刻簗島に出頭。之を受取り礼を厚ふして直にバスに乗り、電車に乗り換え九時十分頃駅着。手荷物に柳行李を附託す。九時十七分発車、手を挙げて送り呉る。快晴。途中無事、但し下関にて午後0時35分、不定期東京行列車に乗る。大分乗客少なく楽な旅行なりし。大阪着十時三十分、中尾さん出迎えらる、同氏家に着きしは十一時過ぎならん。十二時頃まで咄し、寝に就く。甚十郎氏も遅く帰られしとかにて挨拶に来らる。

昭和12年9月7日（火）

昨夜暑くて頗る寝苦しかりし。今日中尾氏と十合に心齋橋に行く。ハイク靴を取換え、次いでグラッドストーン靴を、32, 50にて求め、成子さんに反物、母堂に洋傘を買う。中尾氏の心づくしを見て昼飯を認め、二時頃帰宅。夜は阿倍野に金光祖師詣でのお伴す。猶電報を東京増田翠子宛て、五時二十分着を報ずる為、文案を工夫す。曩に目誌の必要を申越したるにより、左手にトランク、右手に信玄袋を持つこととし「ゴゴ5・20 トウケウ ツク ヒダリトランク ミギフクロ」こんな文句を発送せり。柳行李は嵩張って持憎いから、信玄袋と換えて貰ひしなり。靴は存外小さく、土産物半分も収容し切れず。今夜も十時過ぎ寝床。暑気強し。

昭和12年9月8日（水）

神戸発八時二十二分、大阪九時発かもめ特急に乗る。成子さんも送り呉る。家の前よりタクシーにて駅に至り、

特急券を求む。電話にて大阪駅に照会し、三号列車に定まる。二十余分にて大阪駅着、定刻発車。列車内には扇風機、氷水等の設備あり。途中無事五時二十分、東京駅着。翠子氏に迎えられ、タクシーにて同氏住居に至る。1, 20円と覚ゆ。玄関を入れば六、八、三、座敷の八畳には縁があり便所が続く、風呂場と物置とがある。十八円とか聞こえし。広美の身上及び塩川より連れて来たりし姪18の身上にも及ぶ。妹は洋裁にて生活費位は収入ある由。一女は尋一と聞く。風呂に入り十時寝床。

昭和12年9月9日（木）

昨夜は涼しかりし。殊に家は高台にあり、周囲喬木聳え夏も陽を遮る位にて割合涼しと聞けり。さるにても、昨夜は余りに涼しかりし。蚊帳は吊りたり。大阪にて蚊に刺され頭膨れ上がる。朝九時翠子氏及び姪氏に送られて、バスにて赤羽駅に至り、東京上野発十時、赤羽十時十四分急行にて発、午後二時二分郡山着。二時十分郡山発列車内にて、乗車券を作成して貰ふ。若松着、午後三時五十五分。熱海より三谷に電報す。間に合わぬかも知れぬと謂わる。誰も迎えに出て居らず、俵を傭ふて三谷に行く。五十銭与ふ、四十銭の約束なりしも車夫の思ひしより遠隔なるを懼れたるに由る。此日も日中は暑き様なるも夕方より涼し。三谷にては伯母のみにて、字を読み得ぬとかにて少時放置しありしものの由。義夫帰らず、十時前寝る。枝豆など食う。

昭和12年9月10日（金）

天候陰悪。朝降雨、雨傘を携（たづさ）ひ七時半頃出発。昨夜作られた団子（光江の命日と謂ふ、経文を捧ぐ）、

花卉（かき）類、線香、マツチを準備、城南豊岡墓地に向かう。六日町小国屋にて菓子1, 10円を小柴氏に送り、鈴木貞江氏を横三日町たぬき湯向かいに訪ね、工業学校前より本丸を経、墓地に至り香花を手向けて読経。夫れより二の丸あり、裁判所側を栄町に、此の通りは目下舗装しつつあり。一直線に甲賀町を五の町角に小柴氏を訪ふ。二十分間の約束にて座敷に請ぜられ、十時半頃辞して出発。一旦三谷に帰り、恰度お浪氏の来たりしに頼み、昨の車夫を電話21番にて来らしむ。午後一時五十五分発列車を利用せんとしたるに、午後一時十分ガソリンカー出発の間に合い、夫れに乗車、塩川に行く。兵士の出征を送る人々駅頭に殺到、混雑を極む。十分余にして塩川着。古町に野辺氏を訪ふ。四郎氏及び二男某氏と在宅。賢助氏出征兵士歓送の為、外出。先日逝（さ）られし夫人の霊は、猶座敷正面に安置されあり。余は挨拶を済まして霊前に読経し、中津の現状を話す。四郎様は賢助氏を搜索せらるる様子なりしも、其の儀に及ばざる旨を述べて三時頃出発。上田谷地に看家は誰も居らず。少時して姥車挽ける少女来る。尋ぬれば村に居るとて直ぐ呼び来る。おとぢ氏来る、乃ち挨拶を済まして叔母の霊に読経す。猶西の家、広美の父母を訪ふて翠子氏のこと、広美の事を話す。夕食をうどんにて駒次氏宅にて馳走になり、土産に味噌漬け小豆を、西の家より鶏卵十五を貰ふて、午後九時五分笈川（おいかわ）発にて、五郎氏に停留所まで送られ出発す。駒次氏は兵士出征及び馬匹（ばひつ）徴発の関係にて、役場事務多忙の間を帰宅せしものなり。若松にて約一時間待ち合わせ、十時三十五分発終列にて、午前0時37分郡山着。午前2時35

分奥羽線急行発車まで二時間を、薄寒く降雨甚だしき間を待合す。此の雨は若松を発車当時は降らざりしもの、但し陰悪の様子は朝来兆し居れり。

昭和12年9月11日（土）

雨は益々甚だし、夜を徹し黎明を迎ふ。列車内は入営兵士の出征面会の人々を満載して超満員、車内通路を埋む。余鞆を通路に横たえ腰を下ろす一瞬も出来ず。六時四十七分、山形駅にて二郎に電報す。「急行にて後着く」、然るに駅扱いは八時より受付をなす。一時間余を保留せること判明。新庄湯沢間にて、嘗て若松局に居りし野崎誠氏に、先方より聲かけられ少時話す。氏は鉄道受負い金井組の店員となり、巻脚絆式の軽装にて、如何にも人夫頭に相応わしき扮装なり。東京芝区新橋二の三四に電話を所有し居るらし。誤って横手に下車、乗車券中郡坂町間を此の地に來るを経ず、大曲の誤りを認めて急ぎ元の列車に乗り、幸いして間に合う。十時四十二分大曲に至り角館行き切符を求め、十時五十分大曲発列車に移る。四ッ屋長野を経て角館に至る。四ッ屋を過ぎて間もなく、二郎車内より挨拶す。自動車にて角館より駆け付けたりと曰く、静江氏腹膜炎にて角館に來たり、旅館に泊まり療治し居る。今日にて二十余日殆ど平癒せりと。十一時二十七分角館着。自動車にて石川旅館に至る。静江氏起きて身支度を整ひ居る。乃ち挨拶して此処に一泊す。親切に待遇し呉る。仁丹を求め、秋田の銘酒爛漫を取寄せ、葡萄林檎を餐す。雨多少降る。此日まで此の町祭礼とあり、夜に至って雨歇み、太鼓の音、囃しの声賑やかなり。病人の看護の為、少女を傭ふて居る。病人の病状甚だ良し。二郎の病人に対する態度も、至れり搗くせりと云ふ

べし。

昭和12年9月12日（日）

午前中曇り。十時市内を覗き二郎と医師の前にて別る。帰りて出発、帰山を決定す。病人は最早心配に不及とあり。十一時出発。自動車にて五里半の途を、三里にて自動車を棄て徒歩にて一里を歩む。此頃より暴風雨、靴を脱ぎてゴム靴を借り洋傘をも借り、四人連れ立つ外に人夫を傭ひ、余等の荷物を負わせ先頭せしむ。此間道路拡張工事中、間もなく再び自動車上の人となり、二時頃山に着く。小川に面せし部分に、四棟各二軒づつの社宅及び相對して工夫長屋三棟あり。十個一棟と認む。社宅は四半と六の二間、縁は六畳の処にあり。溪流を汲みて飲料とし、ランプを点して前世紀を忍ばしむ。桧木内村松葉より求め来たりし食料を調理して、夕食を早く済ます。

昭和12年9月13日（月）

朝の間、猶雨。六時二十分、二郎久し振り山に行く。四時過ぎ帰る。夜長岡氏来る。同氏は大原の申出に依り、二郎が採用方取計らへしものの由。山形県の人、釣りを好み此日も釣りに出て先刻販宅せし由。いばな、はい等四尾を釣上げたりと吹聴す。夫れを其の儘持来らしむ。手紙道子小野に出す。冷氣強し、晴れ。

昭和12年9月14日（火）

朝六時四十分、二郎と山に行く。晴天。冬シャツ一枚ズボンに二郎の白をかり、ゴム靴を穿きて出かく。相内、高茶採鉱事務所を見て鉱区内を跋涉す。落を摘みなどす。二時頃帰途に就きしも、田沢湖見学に上がる。御座石に

至り帰る。此日金の分析を実験す。巖、黒岩、高羽、丹治に出す。マタタビを二郎に採取し貰ふ。四時頃到着、近頃愉快的な運動なり。

昭和12年9月15日（水）

桧木内局に行き、二郎の保険料を第一相互に支払う。序でに髯剃りす。15銭と云ふを20銭払う。保険料は12, 61。丁字路に下記の表識あり。米内沢角館線 宮田10, 1料、米内沢62, 4、六本杉13, 5、角館20, 5、桧木内生保内停車場 相内潟5, 2、生保内駅17, 7。而して桧木内から金山間半里と見て、金山角館間五里半を数ふべし。二郎五時頃飯る。此夜二郎にモラロジーの概説を話す。所長と意見合わぬとのこと故、大いにたしなめて遣る。

昭和12年9月16日（木）

二郎休み一日、十六日を定例休日とす。山に鉄砲にて狩猟する旨、余を誘う。余行かず。此日水道完成、風呂場（公衆浴場）修築、夜に入り二郎と行く。男女混浴二ヶ所、各別に設備されあるも一方丈け改修完成せしめたるものとす。二郎は獲物皆無、苺を採り来る。余蕨を採り来たり。たら根を掘らす。

昭和12年9月17日（金）

朝小雨。霽れて後、次第に曇り。石田氏帰京の為、多忙の由にて帰宅遅延の旨、手紙にて申越す。此の朝早く出発。米沢坂町経由にせんとしたるも、二郎是非送りたい旨申出に付き、午後四時頃出発にしたるが、二郎送られぬとあれば四時まで待つ必要なしと見て、三時出発と



決む。人夫一名送り越す。即ち鞆を渡し先発せしむ。余は二時半、静江氏の折角の心尽くしの小豆団子の馳走に預かり、三時に十分前出発。恰度二時間にて二里半の路を突破す。人夫は漸く一二丁目手前にて逢ふ。鞆は筋向かいのタバコやに置きあり。五時四十分タクシー不来、バスにて出発。途中にてタクシーに逢ふ。此の日途中小雨、幸に甚だしからずして停留場に達するを得たり。六時半、角館石川旅館に至る。タクシー料金三円、角館坂町間3, 71円、停車場へタクシー50支払う。二郎に一文も迷惑かけず。但し土産物、筋子納豆代金、小林旅館立換分は二郎に支払わす。二郎の志意を尊重してなり。一時間旅館に待ち、停車場に向かう。七時十二分終列に乗込む。大曲着七時四十三分。同駅発七時五十五分、秋田着午後九時七分。鞆を一時預けとして市内に出て、鶏卵五錢を十個求め駅に待つ。郡山にては二時間の待合いに過ぎさりしが、爰（ここ）は五時間余、かなり退屈せり。

昭和12年9月18日（土）

午前二時二十五分急行かなり多し。二人席を一人にて占め横臥し居る故、空席なし。漸く割込む。弘前に出征兵士の面会に行きたる販途らしきか、ただし此等は皆林檎を一抱え持込み、網棚を埋めつつあり。新津にて多数下車し多少楽になる。余の前に京大法科生あり。午後一時過ぎ食堂に行きたるを見て、余も次いで食堂に定食注文す。検札係員に敦賀大阪間の乗越しを懇請したるも、急行券は敦賀にて打切るべきものなりと称し、何故か大阪着までの間に手続きを採り呉れず。然るに大阪駅にては其の儘見逃し呉れたる為、寺田町行き切符を求め電車に

て同駅に至る。裏口に下車したる為、大いに間誤付き、漸く人に尋ねて中尾氏宅に至る。降雨、相当濡れる。時に午後八時、夕飯を親子にて馳走になる。九時入浴、色々話す。成子さん甚十郎氏を迎えに寺田町駅に行かる。雨傘持参されたるなり。

昭和12年9月19日（日）

朝の間曇り。朝食後十合に買い物に行く頃日より、陽も射し来る。心齋橋電車停留所側の飲食店にて午餐をすまし、局員に半襟、子供に帽子、剣鉄砲、人形等の外、宅に外流行反物各一反づつ、拾円五拾銭を費やす。此日中尾氏に五円を礼す。二時頃飯宅。十時寢床。

昭和12年9月20日（月）

晴れたり曇ったり、成子さんも大阪駅まで送り呉る。七時五十七分急行、福知山まで乗る。十時三十二分発正明市行きに乗換ふ。今市着急行は四時七分なるに、二時間遅れの六時十八分着にて、更に大社へ六時二十五分発、三十七分着にて俵を傭ひ大社参詣。十六日の満月飯せと中天に繋がり、白昼を凌ぐ概あり。物産陳列所にて絵葉書十五銭を求め、駅前飲食店にて夕食を済ます。1, 35をとらる。絵葉書、中尾、芦沢に書き今市にて発送す。今市より午後九時七分、下関行きにて楽な旅行をして・・・割合に寝られず時々夢見る。

昭和12年9月21日（火）

幡生より博多まで切符を求め、手荷物をも同時に送付方依頼。電報を以て着時刻を通告せんとしたるも、八時受付とて預かり呉れず。小倉にて漸く預かり呉る。博多に

着したるも誰も来て居らず。電車にて及びバスにて帰宅。然るに道子と久子は迎えに行き居れりと云ふ。余は便所を耐えて来たりたれば、直に上厠水浴す。皆来たり土産物を与ふ、大いに悦（よろこ）ぶ。更に襟など中尾氏よりのと交換し、局員に悪いのを入換えなどす。此の日、小雨晴れ。早く寝る。

昭和12年9月22日（水）

曇り時々晴れ。外出せず。天プラ等の外、色々馳走あり。冷氣浴衣にては凌げぬ位、蚊帳吊る。

昭和12年9月23日（木）

秋季皇霊祭。此朝隣家の槇氏平尾に移転、挨拶に来らる。馴れたる方に去られて淋しさを感じらる。正午久子と秀夫を訪ふ。再び痔に見舞われ診療所にて手術し、本日より出勤したる由にて不在。夫れより松屋に至り人形を求め、局用品を1、10、4銭、1銭、文書挟み、子挟み、鳩目釣り等。二時帰る。バスの中にて林氏妻女に逢ふ。玉屋に買物と覚えし頃日、多忙帰宅も後れ日勤なしと云ふ。概ね晴れ。古蚊帳吊る。

昭和12年9月24日（金）

久子の強請に、東中洲弁大座に、朝日新聞愛読者招待の活動を見に行く。正午に近かりし。入場料五銭、時局ニュースを除いては格別面白しとも感ぜざりし。三時猶終局を見ざるも販り、玉屋に入り一巡して帰るさ、山崎清五郎氏を訪ふ。福岡一燈園、一先ず閉鎖を物語らる。二十六日会合方、慇懃（しょうよう）せらる。松居様も近日名古屋に女婿（じょせい）の就職口が出来たと云ふので、

そちらに一同移転のことに決定せし由。桑原様は数日前に帰られ、安藤様方に、今後専ら托鉢専門に努めらるるとあり。

昭和12年9月25日（土）

貯金100円払戻し交付、年金受取。此日快晴。澄子より余の留守中、大原より電話にて至急後藤寺に来たれとあり、目下不在の旨返電せる由。其の後数日、母堂来、女中問題をぶちまけ、相談に来られしものの如きも、女賢ふして牛売り損なふ類か、此の話を聞くや早速二郎へ書面発送。佐世保に相談せよと、同時に静江氏にも送付せり。十時寢床。

昭和12年9月26日（日）

昨日までの快晴に引換え朝より曇り、夕刻より遂に降雨。二時秀夫来宅、三時半飯る。痔瘻（じろう）手術の模様等話す。今回は診療所にて療治せりと云ふ。夕、鰻飯。此夜山崎氏宅に行く筈の処、同氏より葉書に集合所をも辞退すとあり。恰も降雨猛に行くを阻むものの如し。乃ち歇む。道子に「母の書」1, 30を、山崎氏に支払を托す。

昭和12年9月27日（月）

四時起床、行事。型の通り発車二十分前に出発、回数券を忘れ戻りたる如き失態あり。バス待合いを覗いては、数名居るもバスは見えず、駄足にて進む。電車通りに出でたるとき、拾分を剩す。久子より貰ひたるバス券、所在不明に帰せしむ。停車場に至りしに猶五分を剩す。八時十分発車。土産物を持ちたれば頗る厄介なり。十一時半中津着。余の向かい側に、黒頭巾黒衣の尼僧二名あ

り。旧教人らし、新田原に下車。余の傍らに座席を占し女御は、四才の男子を連れ、八幡より里方の中津に販ると云ふ。小倉にて子供の強請にて弁当を購い与ふ。駅前を七八間出づれば巖に逢ふ。土産品を届けて、余は直に局に向かう。局員に留守中の挨拶して、労苦を犒（ねぎら）ふ。十合より求め来たりし土産品を頒配す。経費下渡し、給料支払いを済ます。為替九円不符合等の事故にて、七時過ぎまで居る。道子より照死すと報ありと電報し来る。巖よりも佐世保発電報を示す。帰れば巖外出、盗聴摘発の為らし。間もなく販る。十一時を越えるまで皆と話す。夜半蚊襲撃、容易に睡られず閉口せり。

昭和12年9月28日（火）

晴れ曇り半ばす。蚊帳診て貰ふ、大穴ありし由。五時半帰宅。朝永江氏保険募集に外出し、三時間程奨励に昼瘡（ちゅうすい）大いに成績を収む。余之を褒め感謝せり。此夜蚊帳修理され安眠し得る。

昭和12年9月29日（水）

朝より降雨、終日歇まず。夜に入りても尚続く。中津局に利札払渡しに一銭過払いを来たしたる措置に付き、竹折氏に訪ね帰局。寺町附近にて相談所書記に逢ふ。医師二人配置のこととなり、人物銓衡中と云ふ。竹折氏より追払い取扱い方尋ぬ。一旦帰局、容易指示す。此の朝、賄い料10円提出。巖に筑紫亭を訪ね一人三円にて二十五名を招請すべきに対し、差支えの有無問合わさしむ、差支えなき由。昌江へ昨弔電、巖に命じ発信せしむ。今朝来の雨、夜に入り寧ろ甚だし、十時寢床。

昭和12年9月30日（木）

曇り時々晴れ。九時二十分出発。巖猶残り居る。此日唐津黒岩氏より福田氏を未亡人に取持つ件、未亡人に閲覧せしむ。昨筑紫亭に巖をして相談せしめたるに、参円にて差支えなしと云ふ。為替整理完了せず六時まで待つ。帰宅六時二十分。巖両児を連れ余を迎えに來たりし由に付き、余も後を追ひ出掛く。途中より戻る。今度は巖が余を捜しに來る。夕食後入浴。局にて手紙の返信を認む。松木、須藤両氏へ。夜雨模様。筑紫亭招待状に記載すべき文案起草せり。夜相当に熱し。市にて戦没将士の合同葬を営む。今日風呂沸く、水浴を見合わせ入浴す。雨次第に甚だし。併し割合に温暖なり。